



みちくさ言語療法—ことばの発達と障害の臨床より—

(3) 「三密」回避のグループダイナミクス

工藤芳幸

自粛か？活動継続か？

児童デイ・放課後等デイの非常勤 ST という身分で現場での臨床実践にも片足を突っ込み続けている。たまたま研修会で知り合いになった保育士さんの職場に遊びに行ったら、そのまま働くことになったのだが、日頃は大学で仕事をしているので、細く長くという関係で継続している。

新型コロナウイルスで子どもたちの暮らしも変わった。

年明けから新型コロナウイルスの影響が出始め、しばらくの間は非常勤先の児童デイ・放課後等デイでの個別指導やグループ活動も中止となっていた。5月に緊急事態宣言が出された際、児童デイや放課後等デイは自粛対象にはならず、開けておくことを前提とした対応で私も出勤を要請された。普段来所している全員が一度に来るとかなり密集してしまうため、自宅にすることができ家庭には協力を仰いで、少人数での実施を試みた。私も出勤の日には車にアルコール消毒液を積んで万全の準備を整えた。窓を開け放って十分な換気を行い、必要と考えられる感染対策をしながら、おそるおそるの再開であった。

遊びを広げるグループ活動に関わる

非常勤先で学齢児のグループ活動に参加し始めたのは、比較的最近のことである。それまでは主に幼児期の子どもに個別指導の枠で関わってきた。就学後のことが気になっていたが、なかなか機会を設けることができずにいた。ある時、幼児期に関わった子どもたちが通う学童保育の様子を見学した。驚くほど大人数の子どもたちが通っていた。じっくり遊び込むことが難しい子がいたり、友達同士でのコミュニケーションが上手いかなかったり、集団の遊びに入りきれないでいる子がいた。同じ空間にいても、室内を浮遊しているように手持ち無沙汰な子もいた。遊びのアイデアに乏しく、十分に参加もできていないので経験値の少なさが感じられる子どももいた。

こうした背景や現場のスタッフからの提案があって、少人数で共有できる遊びを広げていく目的で月2回程度、ことばやコミュニケーションに関係するゲームや手先や身体を使う遊びを少人数で試みるようになった。事前準備の参加は難しいので、アイデアは出しつつ、製作物などの準備は保育士さんたちにお願ひし、私は当日参加のスタッフというようなかたちで関わるようになった（保育のスタッフからいろいろな活動

のアイデアを出てくるで、むしろ私の遊びの幅が広がって楽しんでいる)。

グループに参加しているのは発達障害の特性 (ASD、ADHD、LD) がある子どもたちで、幼児期から関わっていた子どもたちも多い。巷では SST (ソーシャルスキルトレーニング) や学習支援などを売りにしている施設があちこちに立ち上げられているが、ここではそういう看板は上げず、幼児期からの活動の延長で、遊びの幅を広げ、子ども同士のコミュニケーションを促す場を作ることが大きな目的である。そのため「相手の話に注目すること」、「話している内容に耳を傾けること」、「相手の様子を見て順番や役割を意識すること」などが促されるような活動内容を準備してきた。遊びのアイデアを増やすことや未経験の遊びにもチャレンジすることを大事にするとともに、よく知られているゲームや遊びをじっくり遊ぶことも大事にした。グループを開始したばかりの頃は、極めて有名な「すごろく」を数人で遊ぶということだけでも、最後まで辿り着くのにかなりの時間とエネルギーを費やした。さいころをふる順番を待てない、順番を忘れる、他の子どものコマの進み方を見ていない、負けそうになると途端にかんしゃくを起こす・・・など、いろいろな事態が起こるのだ。「他の子どものやっていることに興味を向ける」「協調する」ということが、なかなか難しいのである。

思いがけない展開

さて、話を現在に戻そう。緊急事態宣言下での、久しぶりのグループ活動再開。休校中なので自宅から 1 人ずつ、時間差でやってくる。長らく顔を合わせていないので、「ど

うしてた?」「家で何しているの」と私からの質問は尽きない。長期の自宅待機で子どもたちがしんどくなっていないだろうか、意欲が低下したり、イライラが募って暴発したりすることがないだろうかと心配もしていた。普段とは異なる見通しがない状況で不安を増大させていないだろうかなど、登園してくる子ども表情やしぐさに注意を払っていた。いつも「今日は何をしたの?」系の質問をすると、その時の子どもの関心とは合わないことが多く、目の前にある何かで(サッカーゲームやら何やら)遊ぶ方向に注意が向かうことがままある。しかし、この日は違った。自宅での過ごしについて、詳しい話をしてくれた。コロナのことも驚くほどよく知っているし、そのことを語ることができた(日頃は経験を語るということがなかなか難しい子どもたちのグループなのである)。

そうこうしているうちに、次々と子どもたちが登園してくる。せっかくウィルス感染予防について滾々と説明しておいたのに、そんな話はどこかに吹き飛んで、駆け寄って抱き合い喜ぶ小学生たち。「おおおー、〇〇! 久しぶりー」。抱きつかれた方は少々困ったような、でもまんざらではない表情。普段は「相手の名前を呼ぶ」というシーンを見たことがない子どもが他の子どもたちの名前を呼び、声をかける。めいめいバラバラに動いている子たちが「これやろう」「いいね」と誘い合う。その輪に積極的に入りたがる。

取り敢えず、私の役目は「密を減らす」ことであり「はい、離れて離れて」と声をかけてまわったり、敢えてイスを置いて距離を取ったりと、とにかく物理的距離を空けることに集中した。この日の活動内容も接触せず、輪にならず、対面にならず、子ども同

士のコミュニケーションがなくてもできる製作活動を主体にした（果たして楽しめるものなのだろうか？という思いもあったが、持ち帰りができるものは楽しいことのようにだ）。私は机を置いて空間を区切って…せつせと物理的距離を空けることにいそしむ。ところが子どもたちは距離を空けても心の距離を詰めて、自ずからコミュニケーションを始めていた。普段とは違い相手がやっていることに関心を持ち、自分が描いているものを伝え合っていた。絵を描きながら趣味の話で盛り上がっていった。いつもは一方的に話すシーンが多いのだが、この日は相手の話を聞き、それを引き取って返す姿があった。思いがけない展開である。スタッフの一人が「やっぱり人を求めているのよ」とつぶやいた。少人数で短時間でも活動を継続して良かった、と。こうなってくると、普段の「他者に関心が向かない」、「一方的に話す」という状況は何なのだろうか。

「同じ」と「つながり」の圧力

感染対策のために人数を減らしたことで空間的にも余裕が生まれ、子ども同士のやりとりが促されたこともあるだろう。それよりも密を減らすこと、人と話さないように促すことで、「人の話を聞きましょう」「みんなで作らしましょう」という社会的な圧力の減少が大きな理由に思えた。逆説的にコミュニケーションを意図しない製作活動がコミュニケーションを「媒介」してくれたのだ。こうしたことはたびたび経験してきたが、今回は劇的な気がした。スタッフの間でも「発達障害の子どものグループ活動はこうあるべき」という発想が無意識に蔓延していたような気がしてならない。

発達心理学者の赤木和重はアメリカのシラキュース大学で客員教員として研究生活をし、地域の学校教育に触れた体験から、日本とアメリカの教育や保育、療育について「同じ—違い」と「つながり—個人」の2つの軸で考察している（赤木, 2017）。赤木によると、日本の教育を象徴するのが「同じ・つながり」というキーワードである。「皆と同じように学び、かつ、友達同士のつながりを求める」ことに価値をおいたインクルーシブ教育は、とりわけ自閉スペクトラム症などの発達障害特性がある子どもたちにとってハードルが高い。一方で、シラキュースでは「違いを重視・尊重し、個々の活動を重視」した関わりが行われていたという。どちらが良いということではない。日本の教育や保育、療育の現場では「違いを認める」ということよりも「皆一緒に一定の同じことができる」方により価値が置かれていて、その状況の中で起こる社会的な課題があるということだ。

私が参加しているグループ活動にも、そうした「同じとつながり」の価値観が内包されているのだと思う。発達的な凸凹がある子どもたちへの療育的な意味合いがあるグループ活動であり、子ども同士の相互性を促す場をつくるという方向性は間違っていないと思う。しかし、無意識に「みんな一緒」を軸とした関わりが主体になり過ぎると、そのときの子どもの自身の中にある動機が見過ごされてしまうかもしれない。結果的に「みんな一緒」の価値観に適応的であることが優先され、生き生きとしたコミュニケーションの相互性が失われてしまうという、目的とは逆の作用をもたらす可能性があるのだ。

多様性の軸から子どもを見る

また別のある日のこと。色画用紙でロケットを製作して飛ばして遊ぶ活動をしたことがある。出来上がったロケットを少し高い場所から飛ばそうと、小学生男子たちはわれ先に背の低い机やイスに乗って飛ばしては大騒ぎ。三密回避でそこでも「離れて離れて」と声かけしていたが、小学生らしいカオスぶりで微笑ましくもあった。そのときに別室で、周囲の状況とは独立して一人でロケットを飛ばして楽しんでいる男の子がいた。「この行動は心配だ、気になる」とスタッフには評価された。その場の雰囲気は「みんなで盛り上がる」だったからであろう。一方で、それはそれで良いのではないかと思えた。製作したロケットをじっくり飛ばすには、むしろ一人で広い場所でやる方が合理的であるし、遊び方は多様であって良いはずである。その男の子は「なぜわざわざみんなで同じような場所から飛ばすの？」と聞いていたかも知れない。活動終了後に記録を書きながらスタッフ間での振り返りの場では両方の意見が出された。

療育の場というのは、実のところ目に見えない規律の場でもある。保育や教育、医療とのゆるやかな連続性を持った場であり、逸脱性や揺らぎに対して不寛容な眼差しが向けられることは少なくないのではないだろうか。とりわけ、「発達」という側面が関わってくると、どうしても平均的な発達像からの乖離と能力を伸ばす方向性が入り込んでくる。就学や就労などの制度的な枠組みから自由ではいられない。しかし、子どもの能力やスキルを伸ばす、何か将来に向けた有用な力を身につけられるといったことを主軸にして物事を考え出すと、子どもも

大人もしんどくなっていくような気がする。

取り敢えず、それぞれの「今、ここ」を認めたところから始めてみる。「平均的で適応的なグループとしての活動」に合わせていくのではなく、それぞれの子どもが「何に向かって」「何に心が動き」「どのように過ごすか」ということに目を向けることである。平均的なコミュニケーションスタイルの確立が「目的」ではなく、何かを実現していく「プロセス」として捉え、多様性があるコミュニケーションスタイルを認める場として機能すると、このグループ活動の目的である相互性がより引き出されるのではないかと考えている。

今回は書かれなかったこと

今回は三密回避の構造で起こったグループダイナミクスの一端から、療育活動について考察した。現在は学校が再開し、「新たな日常」が叫ばれるようになって、どうしてもコロナ疲れが出てきている。心理的・社会的・経済的余裕が減少している家庭もある。生活リズムの変化や学校の授業進度が早くなり、疲弊している子どもがいるし、そもそも不登校傾向になった子がいよいよ疲れてしまって行けなくなることもあるようだ。不安を抱えている親もいる。こうした中での現場の状況についてはまた改めて書きたい。また、普段の「他者に関心が向かない」、「一方的に話す」という状況は何なのだろうか？という問いについてはまだ十分に答えられてない。そこはまた次の課題である。

〈引用・参考文献〉

赤木和重 (2017) 『アメリカの教室に入ってみた—新しいインクルーシブ教育のかたち』 ひとなる書房